



「めいとうボランティア展 in 愛知淑徳大学CCC」
実行委員会の皆さん

大学と地域の協働による ボランティア展の企画・開催

●愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター [愛知県名古屋市]

<http://www.aasa.ac.jp/institution/ccc/>

愛知淑徳大学では、「地域に根ざし、世界に開く」という理念のもと、平成18年9月に「コミュニティ・コラボレーションセンター(CCC)」を開設した。

CCCは、大学と地域社会(コミュニティ)とが連携し、多くの学生たちが「学外で学ぶ」ための新しい教育プログラムを企画・提供する教育機関である。

そしてここでは、「ボランティア学習」、「地域・市民活動への参加」などの単位科目が設置されており、学生たちは、学外に出てさまざまなコミュニティと接することで、豊かな人間性と専門性をもった人材として育つことが期待されている。

「新しい出会い」をテーマとしたイベントの開催

そうした教育プログラムの一環として、CCCで学ぶ大学生と名東区社会福祉協議会(愛知県名古屋市)をはじめ、名東区近郊で活躍する団体や施設等が実行委員となり、企画したイベントが「めいとうボランティア展 in 愛知淑徳大学CCC」(平成19年7月13日～14日)である。



地域とのつながりをめざして懸命な準備

このイベントは、名東区に活動の場をもつボランティア団体や福祉施設などが一堂に会して、それぞれの活動紹介やボランティア活動に関する相談、ボランティア体験の機会の提供を行うことで、地域住民のボランティア意識を高めるために実施された。

また、地域福祉の担い手として大学生の社会参加や社会貢献活動を促進するとともに、学生と地域住民、福祉施設などが交流できる場を創出し、次世代のボランティア活動者を育てる目的もあった。

取り組みの背景には、地域とのコミュニケーションの必要性を重視する大学にとって、ボランティア活動に関する情報不足と、地域のボランティア活動者や福祉施設との関係強化といった課題があった。

一方、名東区社協では、かねてより学生たちを地域福祉の新たな担い手として捉え、そのボランティア活動を充実させていきたいと考えていた。

こうした両者の想いが一致し、さらに、名東区内のボランティア団体などで組織される「名東区ボランティア連絡会」や、ボランティア活動の受入側である福祉施設関係者を巻き込みながら、「新しい出会い」をテーマとした協働イベントが開催されたのである。

さまざまな人々のつながりによる企画・運営

2日間にわたり、愛知淑徳大学星が丘キャンパスを会場として行われたイベントの企画・運営は、26名で構成された実行委員会が主体となつてすすめられた。



パフォーマンス小劇場と
競技用車椅子の体験フロア



そこでは、学生をはじめ、ボランティア連絡会のメンバー、福祉施設関係者、社協職員が、互いに顔の見える関係を大切にしながら、多様な発想を語り合い、そのつながりのなかから一つ一つの企画を具体的なかたちにしていった。

こうしたことの意義について、名東区社協の小林陽さんは、「普段は出会う機会が少なかった人たちが、ボランティアの啓発イベントといった共通の目的のもとで、対等な立場で企画を考えていくことができ、親睦や交流を深めることができました」と述べている。

イベント開催期間中の会場は、ボランティアをテーマとした体験フロア、展示フロア、交流フロアに分けられ、地域の福祉施設やボランティア団体がブースを出展するなど、大学という施設が地域の人々に開放されて、「ボランティア色」に彩られた。

また、ボランティア活動の奥深さを伝える講演会「ボランティア活動を100倍楽しむ方法、教えます!」や、パフォーマンス劇場、競技用車椅子の体験なども行われ、2日間あわせて約600名の参加者で賑わった。

学びの場としての支援強化をめざす

こうしたイベントの効果として、企画・運営した学生たちからは、「自分に自信ができました」「ボランティアが身近に感じられた」「人との出会いの大切さに気づきました」との声が寄せられた。

また、ボランティア連絡会や福祉施設の関係者からは「若い人たちがボランティアに興味をもってくれたことをうれしく思う」「学生さんをはじめ、地域の人たちとの関係を大切にしていきたい」などの感想もあり、「新たな出会い」をコンセプトとした取り組みへの反響は大きい。

イベント開催が、大学そのものにもたらした成果についても、CCCの講師である小島祥美さんは、次のように述べている。「実際にボランティア活動で活躍されている方々の生の声やその姿を、学内で魅せていただいたことは、学生のみならず、教職員にとっても有意義なことでした。また、ボランティア啓発イベントという、本学にとっては初めての機会を与えていただき、地域の人々をどのように迎え、どのようなつながりをつくるかなど、一つの目標に向かって学内でコラボレーションができたことも大きな成果であったと思います。」

さらに、学生たちにとっては、イベント実施をきっかけとして、ボランティア活動の重要性を感じ、活動について知るといった目的意識が明確なものとなっている。そして、身近な課題への興味や関心が高まり、その後の活動の活発化にもつながっている。

愛知淑徳大学CCCでは、ボランティアをテーマに大学と地域とのつながりを実現できた「めいとうボランティア展」を機に、今後も、学生たちと地域の人々が出会える場をより多く創出しながら、学生たちによるボランティア活動や地域貢献の推進を、積極的に支援していきたいと考えている。



名東区社会福祉協議会
小林 陽さん



愛知淑徳大学
コミュニティ・コラボレーション
センター
小島祥美さん

今月号では、本年3月に行われた「大学生のボランティア活動推進を考える懇談会」での先駆的な事例報告を通じて、地域の多様な主体が参画して学生のボランティア活動を推進することの意義や、大学生に対する教育的効果を探ります。また、地域の活動団体や中間支援組織には、これらの取り組みに対してどのような支援が期待されているのか、その果たすべき役割について考えます。



交流会では地域の方々と積極的なふれあいも

大学生のボランティア活動推進と支援を目的とした多彩な取り組み

●特定非営利法人 国際ボランティア学生協会 [東京都世田谷区]

<http://www.ivusa.com/>

九十九里浜全域掃除大作戦での活動



国際ボランティア学生協会
とのきあやこ
外木 絢子さん

災害が発生した際に、学生たちが被災地に赴き、現場のニーズと向き合いながら復興支援に取り組んでいる。

平成18年9月には、過去14年間、43の災害現場で延べ1,500名の学生が活動した実績と、危機対応講習など、平時での防災活動に対する取り組みが評価され、「防災功労者 内閣総理大臣表彰」を受章した。

学生の興味や関心を社会貢献へとつなげる役割

IVUSAでは、社会課題の改善に向けて「若者だからこそできる活動」をポイントに取り組んでいるが、同時に、学生たちが大学での学問と併行しながら、社会を「学ぶ」場として、ボランティア活動を位置づけており、すべての活動において学生たちの熱意と主体性が大切にされている。

また、例えば、アジア諸国での電気やガスもない生活体験や、災害被災地での非日常的な体験をとらえて、ボランティア活動が学生たちの成長にもたらす効果にも期待している。

海外でのボランティア活動に参加している学生からは、「自分の知らなかったことを学ぶことができた」との声もあり、そうした「学び」の体験が、多くの学生のなかで受け継がれ、互いに学びを大切にしているIVUSAの“文化”として育まれてきた。

こうした取り組みの意義について、事務局の外木 絢子さんは、次のように述べている。「社会のニーズと、ボランティア活動にかかわりたいとやって来る学生たちのニーズをマッチングしていく役割を重視しているので、学生たちの興味や関心が社会貢献という成果につながることに事業の有効性を感じています。」

取り組みにおける今後の展望について

同団体の事務局では、新たな事業づくりにおいても、多くの自治体や各種の機関・団体との協働や情報交換を図りながら、それぞれのもつ力を結集し、それをより「大きな力」としていきいたいと考えている。

それと同時に、学生たちに対しても、社会が抱えるさまざまな課題や、アクションを起こす場を積極的に提示し、啓発し続けていくことにも力を入れている。

そのためのツールとしては、大学生向けボランティア情報誌「Youth-Acty!!」や、NGO/NPOの団体情報、活動を発信するためのポータルサイト「Turning point」(<http://www.turningpoints.jp>、20年4月オープン)などが活用される。

IVUSAでは、多くの学生の力を集めた活動力と、社会に与えるインパクト、そして学生たちの成長といった成果に手応えを感じている。

今後の展望としては、ボランティア活動への参加の呼びかけをさらに親しみやすいものとしていくことと、いわば「社会起業家」として継続性や事業性をもって社会問題にコミットしていくことのできる若者を輩出することをめざしている。

学生たちの「夢」を実現することをきっかけに

国際ボランティア学生協会(IVUSA: イビューサ、International Volunteer University Student Association)は、社会のために自分のもっているパワーと感性を活かしたいという学生たちのボランティア活動をサポートするために、平成5年に設立され、平成14年にNPO法人格を取得した団体である。

同団体の発足は、平成4年に学生たちの「夢」を集めて、それを実現させる目的で、国士館大学内で行われた「夢企画」がきっかけとなっており、参加した学生たちの「社会に貢献したい」という熱意によって組織化された経緯がある。

IVUSAでは、現在、国内外のさまざまな問題に対して、人と人をつなぎ、多様な社会をつなぎながら問題解決を図り、持続可能な自立した共生社会の実現をめざしている。

そのためのミッションとして、国際協力、災害救援、社会福祉、環境保護といった4つの分野での社会貢献を掲げており、約50大学800名の学生たちが会員として自主的に参加し、常勤4名・非常勤7名の職員がそのサポートにあたっている。

ボランティア活動を支援するための事業展開

IVUSAの具体的な取り組みには、まず、平成12年9月に国連で採択された「ミレニアム宣言」に基づく国際協力活動がある。

これは、ラオスやインド、ネパールなどのアジア諸国を中心に、学校建設や住宅建設の支援を目的としたボランティア活動の推進事業で、現在までに延べ1,030名の学生たちが参加している。

ネパールの小学校建設計画では、行政の目の届かない山間の村に小学校をつくるための支援として、いまも学生たちが活動中であり、カンボジア、インドにおいても同様の計画が進行している。

また、環境保護活動は、国内外の森林破壊、水環境の悪化、砂漠化といった問題と向き合い、自然環境を守るための清掃や植林などを支援することを目的としている。



砂漠への植林を目的とした
中国黄土高原緑化プロジェクト外

学生たちの生活に身近な川や海、山で定期的に行われる「清掃大作戦」には、環境問題への関心の高まりから、時には1,000名以上の参加者がある。

海外においても、現在「中国黄土高原緑化プロジェクト」が進行中で、延べ665名の学生ボランティアが、黄河流域に広がる黄土高原の植林作業に取り組んでいる。

そして、地域活性化事業をメインとした社会福祉活動では、学生たちが過疎に悩む山村などに入り、「村起こし」のために若いパワーを発揮したり、地域の高齢者・障害者施設の支援を行ったりしている。

さらに、災害救済活動においては、地震や台風、豪雨などの



インド洋津波災害復興支援活動では、新しい村の建設をめざす



新潟県中越地震(小千谷・塩谷地区)後のボランティア活動

特集

大学生ボランティアの意義と効果を考える

大学生のボランティア活動推進がもたらす 教育的効果と今後への期待



いけだ ゆきなり
池田幸也さん
常磐大学
コミュニティ振興学部 教授

先の事例にも代表されるように、大学生のボランティア活動はいま、さまざまな広がりを見せています。ここでは、ボランティア活動がもたらす学生自身の成長などの教育的意義と、そのために大学や中間支援組織にどのような役割が期待されているのかについて、常磐大学の池田幸也教授にお伺いしました。

大学のボランティア活動支援について

学校教育現場におけるボランティア活動は、平成7年の阪神・淡路大震災をきっかけに広まったといわれているが、その動きは震災以前からもみられた。例えば、文部省（現・文部科学省）が「ボランティア教育」という言葉で学校教育での推進に取り組み始めたのは、震災の前年からである。それまで、小・中・高等学校の教育内容を定めた学習指導要領には、ボランティアの語はなく「奉仕」が使用されてきた。しかし、ボランティア活動の教育的意味が広がるなかで、高校や大学におけるボランティア活動の単位認定などが推進されていた。

震災での若者を含むボランティア活動が、このような動向を加速し、後の大学におけるボランティア活動の推進に影響を与えた。現在、大学に設置されているボランティアセンターのなかには、こうした背景のもとに誕生したものも少なくない。

例えば、神戸大学総合ボランティアセンターは、阪神・淡路大震災を契機に誕生し、震災後の仮設住宅生活者への支援活動のほか、地域に根ざした多様な活動の場を開拓している。また、学内における位置づけは学生サークルでありながら、大学と地域社会をつなぐ学生による学生のためのセンターであり、世代交代を果たしながら現在に受け継がれている。つまり、ここでは、学生たち自身がボランティア活動に関する多くの「メニュー」と「場」を確保し、それを大学が支援するという形態が特徴となっている。

一方、大学と地域社会の関係が問われるなかで、大学も地域社会の一員としての役割が求められるようになり、これを具体化するために大学がボランティアセンターを設置し、地域貢献の窓口を設けること、学生のもう一つの学びの機会を確保しようという動きがみられる。

ボランティア活動の教育的意義と効果

学生たちのボランティア活動を、インターンシップと同様に、一つの「社会体験学習」と捉えることができる。ただし、インターンシップは職業体験を目的としているのに対して、ボランティア活動における学びは、社会貢献という目的にとどまらない多様な学びがある。そこでボランティア活動を学びの機会として恒常的にどう位置づけていくかが、課題となっている。

学生たちにとってのボランティア活動の意義は、体験をとおして自分のあり方と世の中を学んでいくことであり、さらに自己のあり方と世の中をいかに統合するかである。このような教育的な意義を大学の教育理念に照らし、具体的なカリキュラムのなかで明確に位置づけていくことが大切である。

また、大学生は、趣味のサークル活動やスポーツに打ち込むことで人間的成長を実現している者も多いが、一方でボランティア活動の機会を欲しているが、そのチャンスに巡り会わない学生たちも少なくない。このようなニーズに対して、適切な情報をどのように提供するかが問われている。こうした役割を担う場として、大学ボランティアセンターは重要な意味をもつのである。

さらに、大学で学ぶ知識や技術が、いかに世の中で有用であり役立つのかを、ボランティア活動をとおして確かめることのできるきっかけとなる授業があることが望ましい。また、「ボランティア」という言葉からではなく、学生たちの身近な興味や関心事を生かしたボラ

ンティア活動へとつなげるコーディネーションも大切になってくる。

将来の進路や専門分野、理系か文系かを問わず、ボランティア活動そのものが学生自身にとって「意味のある体験」の場となるのは、ここでは学生たちが、さまざまな経験や思い、考えをもった人たちと出会うことができるからである。

「意味のある体験」は、学生が家族や友人、学校の教員などの身近な存在以外の人々、すなわち「意味のある他者」との出会いなしでは成り立たない。自分の生き方やあり方に大きな影響を与える「意味のある他者」との出会いを提供する場として、ボランティア活動は大きな可能性をもっている。これが、「社会体験学習」としてのボランティア活動がもたらす、最大の教育的効果であると考えられる。

社会体験
学習

意味のある
他者との出会い
・
体験

自己のあり方と
世の中
学び、統合

大学と中間支援組織が連携する意義

大学における「社会体験学習」の推進にあたっては、地域のボランティア団体やボランティアセンターなどの関係者との連携が重要となってくる。例えば、社会福祉協議会は住民の主体形成と地域福祉の推進を「啓発」する組織であるが、「啓発」とは広義の意味で学びを促進することである。すなわち、ボランティア活動を推進・支援する中間支援組織は、自ずと市民性の育成という教育に取り組む側面をもつのである。

ここに、大学におけるボランティア活動の推進と地域との中間支援組織が連携する意義がある。

したがって、中間支援組織が大学や学生たちへ積極的に働きかけ、地域ニーズと大学側・学生側のニーズを地域の創造の担い手の育成という視点からコーディネートしていくことが求められる。

ここでは、大学にとって必要な、または学生たちにとって有効な体験プログラムを協働で開発することができるか否かが大きな鍵である。

そして、地域のボランティアセンターなどの中間支援組織がボランティア団体や福祉施設、ボランティア活動にかかわる多くの人々を巻き込みながら、地域そのものが教育の場となるよう調整していく必要がある。

ただし、ここで留意すべき点は、大学と地域とをつなぐことが「目的」ではなく、学生にとって豊かな社会体験学習の機会をつくることである。

本学においても、ボランティアに関心のある学生たちが、県内のNPO団体との協働のもとで、高校生を対象としたボランティア体験プログラムを協働で企画し実施している。この取り組みは、高校生が体験する企画にとどまらず、学生たち自身がNPO団体や地域の人々の活動の現場を知り、多様な人々と出会うなかで学んだことを高校生が学ぶ機会として創り出すのである。

今後も多くの大学と地域において、若者たちのボランティアな生き方を育み、未来社会の形を描く存在を育成していくために、大学生のボランティア活動の推進、とりわけ「意味のある他者」との出会いの機会が拡大することに期待したい。